

(城西人文研究第15卷第1号)

【研究ノート】

# 井泉水編『一茶俳句集』入集の句(二)

黄 色 瑞 華

## 凡 例

- 一 一行めに、井泉水編『一茶俳句集』の本文をおく。ただし、漢字は現行文字とし、ルビは省略した。
- 二 二行めに、出典を示し、句帳・紀行などは( )内にそれが記されている条の年月を示した。年号は改元の月日にかかわらず元年一月からとした。
- 三 原本と表記が異なるものは、出典の次④に原本のそれを示した。
- 四 注は、「前書」の異同と、他書との異同を示すにとどめた。
- 五 原典は、主として一茶全集本により、『浅黄空』などは一茶叢書本その他によった。また、『八番日記』は風間本により、特に異同がある場合、梅塵本と対照した。

## 春(前承)

凍 解

凍解や山の在家の昼談義 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・閏1)

## 雪 解

雪どけや麓の里の山祭 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

雪どけをはやして行や外郎売 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・1)

雪どけや巢鴨辺りのうす月夜 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・1)

㊦ 中七「巢鴨辺り〔の〕」。

雪とけてくりくしたる月よ哉 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・1)

㊦ 中七「クリくしたる」。

雪とけるくくと鳩の鳴く木かな (文化七年)

出典 七番日記(文化7・3)

㊦ 座五「鳴木かな」。

しなのぢや雪が消れば蚊がさわぐ (文化十年)

出典 七番日記(文化10・1)

㊦ 座五「蚊がさわぐ」。

雪とけて村一ぱいの子ども哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

⑩ 七番日記 (11・3)、中七以下「町一ばいの雀子共哉」。希杖本句集・浅黄空「町一ばいの子供哉」。自筆本句集「雪げして町一ばいの子ども哉」。

雪どけや鷺が三疋立白に (文化十四年)

出典 七番日記 (14・1)・浅黄空・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

⑪ 七番日記「鷺が三疋」。

雪どけや大手ひろげし立榎 (文化十四年)

出典 七番日記 (14・1)

⑫ 中七「大手ひろげて」。

本堂の上に鶏なく雪げ哉 (文政四年)

出典 八番日記 (4・9)

雪解や門は雀の十五日 (文政八年)

出典 近世発句類題集 (文政3)・希杖本句集・嘉永版発句集。

⑬ 文化六年句日記 (6・1)、「雪どけや門の雀の」。板本発句題叢「竹は雀の」。発句鈔追加「竹に雀の」。

春 山

ずつぷりとぬれた所が春の山 (文政五年)

出典 文政句帳 (5・3)

⑭ 上五「ずつぷりと」。

苗 代

苗代や松も加へて夜の雨 (文化十一年)

出典 七番日記(11・3)・希杖本句集。

㊦ 句稿消息、中七「山をも添て」。浅黄空・自筆本句集「松もろともに」。

苗代や親子して見る宵の雨 (文化十二年)

出典 七番日記(13・1)

辻堂や苗代一枚菜一枚 (文政七年)

出典 文政句帳(7・3)

春の水

家形に月のさしけり春の水 (文化二年)

出典 文化句帳(2・1)

㊦ 中七「月〔の〕さしけり」。

水温む

鷺鳥雀が水もぬるみけり (寛政七年)

出典 稿本発句題叢(文政3)・希杖本句集・発句鈔追加。

㊦ 板本発句題叢、中七「雀の水も」。

涅槃

ねはん像銭見ておはす貌も有 (文化十二年)

出典 七番日記(12・1)・西歌仙・希杖本句集

㊦ 七番日記「ねはん像銭見ておはす顔も有」。

蒲公英の天窓そつたるねはん哉 (文化十二年)

出典 七番日記(12・1)

㊦ 七番日記「蒲公〔英〕の」。

御仏や寝てござつても花と銭 (文政二年)

出典 八番日記(2・4)

㊦ 前書「二月十五日」。おらが春、「二月十五日」と前書して、「小うるさい花が咲迎寝釈迦かな」「ミ仏や寝ておはしても花と銭」。

小うるさい花が咲とて寝釈迦哉 (文政二年)

出典 八番日記(2・2)・おらが春・嘉永版発句集

㊦ おらが春、「二月十五日」と前書して、「小うるさい花が咲迎寝釈迦かな」「ミ仏や寝ておはしても花と銭」。発句鈔追加、上五「眼の毒の」。

寝ておはしても仏ぞよ花が降る (文政二年)

出典 八番日記(2・2)

㊦ 「寝ておわ<sup>は</sup>しても」。「小うるさい」の次に出。

初 午

初午に無官の狐鳴にけり (文政二年)

出典 八番日記(2・3)

㊦ おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集、前書「初午」上五「花の世を」。

はつ午や火をたく畠の夜の雪 (文政二年)

出典 八番日記(2・2)

⑩ 真蹟、中七「火をたく森の」。

初午や錠の明たる下屋敷 (文政五年)

出典 文政句帳(5・2)

彼岸

彼岸とて袖に這する虱かな (文政三年)

出典 八番日記(3・1)

⑪ 梅塵本八番日記、「捻りつぶさんもいとをしく、又留主にして断食させんも不便さに」と前書して、「人味の柘榴へ這す虱かな」に続けてこの句を記す。

出代

出代や山越て見る京の空 (文政二年)

出典 八番日記(2・1)・発句鈔追加

⑫ 風間本、中七「川越て見る」。梅塵本、中七「山越て見る」。

出代や江戸をも見ずにさらば笠 (文政五年)

出典 文政句帳(5・閏1)

⑬ 文政句帳、この句の次に「出代や江戸見物もしなの笠」。

雛

雛祭娘が桐も伸にけり (文化五年)

出典 文化句帳(5・2)

⑭ 上五「雛祭り」。

煤け雛しかも上座をめされけり (文政二年)

出典 八番日記(2・2)

㊟ 風間本、座五「ゆ(め)されけり」。梅塵本、座五「召れけり」。八番日記(3・3)、中七以下「いつち上座におはしけり」。嘉永版発句集、中七「いつち上座を」。

へな土でおつつくねても雛かな (文政七年)

出典 七番日記(文政1・3)・浅黄空・自筆本句集

㊟ 風間本八番日記(2・2)、「へな土の雛も同じ祭(り)る哉」。梅塵本八番日記、「へな土の雛も同じ祭ふりかな」。梅塵抄録連句集・発句鈔追加「へな土でつくねた雛も祭り哉」。

掌に飴て見るや雛の市 (文政七年)

出典 文政句帳(7・3)・浅黄空・自筆本句集

㊟ 文政版発句集・嘉永版発句集、座五「市の雛」。

草餅

月をめて花にかなしむは雲の上人のことにして

おらが世やそこの草も餅になる (文政十二年)

出典 七番日記(12・2)・浅黄空・自筆本句集・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟ 希杖本句集、前書「月をめて花にかなしむは雲の上人の事にして」。

壬生念仏

出る月や壬生狂言の指の先 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)

桃の日

桃の日や深草焼のかぐや姫 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)

鶏

米時も罪ぞよ鶏がけ合ぞよ (文化九年)

出典 七番日記(9・2)・株番

⑩ 七番日記、前書「布施弁天」。株番「布施東海寺ニ詣けるに、鶏どもの迹をしたひぬることの不便さに、門前の家ニよ  
りて、米一合ばかり買ひて、菫・蒲公のほとりニちらしけるを、やがて仲間喧嘩をいく所にも始たり。其うち木末より鳩  
雀ばら／＼とび来たりて、心しづかにくらひつゝ、鶏の来る時、小ばやくもとの梢へ逝さりぬ。鳩雀ハ蹴合の長かれかし  
とや思ふらん。土農工商其外さま／＼の稼ひ、みなかくの通り」。

汐干

住吉や汐干過ても松の月 (文化元年)

出典 文化句帳(1・3)

汐干瀉雨しとしと暮かかる (文化元年)

出典 文化句帳(1・2)

⑪ 中七以下「雨しと／＼と暮かゝる」。

鶏のなく家も見へたる汐干哉 (文化元年)

出典 文化句帳(1・3)

青天の又青天の汐干哉 (文化九年)

出典 七番日記(9・2)



## 鞞韃

ふらんどや桜の花をもちながら (文政七年)

出典 文政句帳(7・2)・たねおろし・文政版発句集・嘉永版発句集

⑤ 文政版・嘉永版発句集、前書「鞞韃戲」。

## 茶摘

つむ程は手前づかひの藪茶哉 (文政五年)

出典 文政句帳(5・2)

## 山焼

山やく山火と成りて日の暮るる哉 (寛政七年)

出典 <sup>(寛政)</sup> 西国紀行(7・2)

⑥ 座五「暮るゝ哉」。

うつくしい鳥見し当よ山をやく (文化二年)

出典 文化句帳(2・2)

山やくや眉にはらく夜の雨 (文化二年)

出典 文化句帳(2・2)

又一つ山をやく也おぼろ也 (文化二年)

出典 文化句帳(2・2)

山焼やあなたの先が善光寺 (文化九年)

出典 七番日記(9・2)

山焼や夜はうつくしきしなの川 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)

山焼の明りに下る夜舟哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)・だん袋・自筆本句集・発句鈔追加

㊦ 嘉永版発句集、座五「夜舟の火」。

野 焼

つやつやと露のおりたるやけ野哉 (享和二年)

出典 享和二年句日記(2・1)

㊦ 上五「つやくと」。

野火山火夜も世の中よいとやな (文化十年)

出典 七番日記(10・1)

㊦ 中七「夜も世の」中」。

わらんべも蛙もはやす焼の哉 (文化十一年)

出典 七番日記(11・3)

田 打

から先や田も打上て夜の雨 (文化八年)

出典 七番日記(8・1)・我春集

㊦ 七番日記、上五「から崎や」。我春集、上五「辛崎や」。文化三〜八句日記写、中七「田も打て」。

二渡し越へて田を打ひとり哉 (文政六年)

出典 文政句帳(6・2)

㊦ 中五「二渡シ」。

種 蒔

草蒔や蝶なら一つ遊ぶ程 (文化四年)

出典 文化句帳(4・2)

㊦ 中七「蝶なら一ツ」。

鳥 打

軒下も鳥になして月夜哉 (文化八年)

出典 七番日記(8・1)

㊦ 座五「月よ哉」。

浅間根のけぶる側迄鳥かな (文政二年)

出典 八番日記(2・1)

挿 木

かりの世のかりにさしてもつく木哉 (文政三年)

出典 梅塵本八番日記(文政3)

㊦ 上五「仮の世の」。この句の次に中七以下「仮家の門にさし木かな」。風間本(3・3)、「かりの世のかり家の門にさし木哉」。

猫の恋

猫の子や秤にかかりつつされる (文政元年)

出典 七番日記(文政1・9)・浅黄空

㊤ 中七以下「秤にかゝりつゝされる」。おらが春、中七以下「秤にかゝりつゝじやれる」。自筆本句集、中七以下「秤にかゝりてされる」。

汚れ猫それでも妻は持にけり (文政三年)

出典 八番日記(3・3)

恋猫のぬからぬ貞でもどりけり (文政七年)

出典 文政句帳(7・10、8・3)・嘉永版発句集

㊤ 文政句帳(5・閏1)、中七「鳴かぬ顔して」。

鳥の巢

浮世とてあんな小鳥も巢を作る (文政三年)

出典 八番日記(3・3)

㊤ 風間本、座五「巢を作」。梅塵本、座五「巢を作る」。

巢立鳥

堀かけていく日の井戸よ巢立鳥 (文化元年)

出典 文化句帳(1・2)

㊤ 浅黄空・自筆本句集、中七「いく日の井戸ぞ」。

雀の子

むつまじき二親もちし雀哉 (文化七年)

出典 七番日記(7・2)

夕暮や雀のまま子松に鳴 (文化八年)

出典 七番日記 (8・3)

㊦ 七番日記、「夕暮とや」。同 (7・3)、「夕暮や親なし雀何と鳴」。

青天に産声上る雀かな (文化八年)

出典 七番日記 (8・1)・文化三〇八句日記写

㊦ 文化三〇八句日記写、座五「雀哉」。

雀子のはやしりにけりかくれ様 (文化九年)

出典 七番日記 (9・3)・浅黄空・自筆本句集・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加・嘉永版発句集

雀子を遊ばせておく豊哉 (文化十年)

出典 七番日記 (10・1)

さむしろや土人形と雀の子 (文化十年)

出典 七番日記 (10・1)・句稿消息・志多良・希杖本句集

大仏の鼻で鳴く也雀の子 (文化十年)

出典 七番日記 (10・1)

㊦ 中七「鼻で鳴也」。

むら雀さらにもま子はなかりけり (文化十一年)

出典 七番日記 (11・3)・句稿消息

㊦ 中七「さらにもま子は」。

雀の子地藏の袖にかくれけり (文化十一年)

出典 七番日記(11・1)

雀子やお竹如来の流し元 (文化十四年)

出典 七番日記(14・2)・文化14年3月15日付文路あて書簡・文政版発句集・嘉永版発句集

⑨ 書簡、前書「心光院にて」。

雀子や仏の肩にちよんと鳴 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)

⑩ 中七「仏の肩」に」。

雀の子そこのけく御馬が通る (文政二年)

出典 八番日記(2・2)・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集

⑪ 風間本八番日記、中七「そは(三)のけく」。七番日記(文政1・3)、「それ馬がくとやいふ親雀」。

親のない子はどこでも知れる爪を唾へて門に立、と子どもらに唄はるるも心細く、大かたの人交りもせずして、  
うらの畠に木萱など積たる片陰に踞りて長の日をくらしぬ、我身ながらも哀なりけり

我と来てあそべや親のない雀 (文政二年)

出典 おらが春・嘉永版発句集・発句鈔追加

⑫ おらが春、中七「遊べや親のない雀 六才弥太郎」。七番日記(11・1)、「あそぶ親の」。浅黄空、「親のない子ハ肩身  
でしれるなど唄れ、心ぐるしく、うらの毛小屋「三」一人日なたぼこして」と前書して、「遊ぶ親のない雀 八、時」  
句稿消息・自筆本句集、中七「遊ぶや親の」。句稿消息に「八才の時」。

雀子やものやる児も口を明 (文政三年)

出典 八番日記(3・3)

門雀兄弟喧嘩始めけり (文政三年)

出典 八番日記(3・3)

⑥ 風間本、中七「<sup>(兄)</sup>口弟喧嘩」。梅塵本、「兄弟喧嘩」。

慈悲すれば糞をする也雀の子 (文政七年)

出典 文政句帳(7・4)

鶯

鶯や松にとまれば松の声 (享和三年)

出典 享和句帳(3・9)

鶯にずつぶりぬれし垣ね哉 (文化三年)

出典 文化句帳(3・1)

鶯や何のしやうもない門に (文化四年)

出典 文化句帳(4・1)

鶯や懐の子も口を明く (文化五年)

出典 文化句帳(5・1)

三日月やふはりと梅にうぐひすが (文化八年)

出典 七番日記(8・1)

鍬のえに鶯鳴や小梅村 (文化八年)

出典 七番日記(8・1)・我春集・稿本発句題叢・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

⑦ 七番日記、「三日月や」の次の出。

やよかにも御鶯よ寛永寺 (文化八年)

出典 七番日記(8・12)・株番

鶯にあてがつておく垣根哉 (文化十年)

出典 七番日記(10・2)・志多良・句稿消息・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 七番日記、座五「垣ね哉」。志多良、座五「かきね哉」。浅黄空、座五「留守家哉」。

赤い実をくはへた所が鶯ぞ (文化十一年)

出典 七番日記(11・1)

㊦ 中七「加た所が」。句稿消息「赤い実と並んだ所が」。

鶯に仏の飯のけぶりけり (文化十一年)

出典 七番日記(11・2)

袖垣へただ止つてもうぐひすぞ (文化十一年)

出典 七番日記(11・春)

㊦ 中七「たゞ留ても」。

鶯がちよいと隣の序哉 (文化十三年)

出典 七番日記(13・2)・句稿消息

㊦ 浅黄空、中七「来るも隣の」。自筆本句集「鳴も隣の」。

木の股の弁当箱よ鶯よ (文化十三年)

出典 七番日記(13・2)・浅黄空・自筆本句集

藪越の乞食笛よ鶯よ (文政元年)



出典 七番日記(文政1・1)

鶯よけさは弥太郎事一茶 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)

鶯や男法度の奥の院 (文政二年)

出典 八番日記(2・1)

鶯の馳走に掃しかきね哉 (文政二年)

出典 八番日記(2・2)・おらが春

⑧ 八番日記(12・3)、上五「鶯が」。文政句帳(7・5)・自筆本句集、中七「馳走に掃かぬ」。浅黄空、中七「馳走に

掃ぬ」。文政版発句集・嘉永版発句集、「松室にあそぶ」と前書して、中七「馳走に掃かぬ」。

鶯やみだの浄土の東門 (文政二年)

出典 八番日記(3・2)

⑨ 前書「天王寺」。

鶯やちよつと来るにも親子連 (文政七年)

出典 文政句帳(7・2)

⑩ 中七「ちよつと来「る」にも」。

乙 鳥

草の葉のひた／＼汐やとぶ乙鳥 (文化二年)

出典 文化句帳(2・2)

浅草や乙鳥とぶ日の借木履 (文化二年)

出典 文化句帳（2・2）

とぶ燕君が代ならぬ草もなし（文化三年）

出典 文化句帳（3・1）

㊦ 七番日記（12・12）、「寛政元年ヨリ文化六年迄」と注記した句群中にも。

乙鳥にきそのみそ搗始りぬ（文化九年）

出典 七番日記（9・2）

臼歌を聞／＼並ぶ乙鳥かな（文化十一年）

出典 七番日記（11・2）

㊦ 座五「乙女（鳥）かな」。

乙鳥やゆききの人を深山木に（文化十二年）

出典 七番日記（12・2）

㊦ 中七「ゆき〔き〕の人を」。栗本雜記（文化9）、上五「巢乙鳥や」。

京も京京の五条の乙鳥哉（文化十二年）

出典 七番日記（12・2）

又おせわになりまするとや鳴燕（文化十四年）

出典 七番日記（14・7）

㊦ 「又おせ（わ）はに」。

小燕や鳥の中の蓬餅（文政元年）

出典 七番日記（文政1・3）

⑨ 一茶同好会本・一茶叢書本など上五「小燕や」と翻刻するが、講談社の複製を見るに「小菀や」が正しい。全集本・講談社全注(丸山氏校訂)は「小菀や」。

日本に来て紅つけし乙鳥哉 (文政四年)

出典 八番日記(4・9)

⑩ 文政句帳(7・3)、「神国のふりや乙鳥も紅つける」。

大仏の鼻から出たる乙鳥哉 (文政五年)

出典 文政句帳(5・9)

夕乙鳥我には翌日のあてもなし (嘉永版一茶発句集)

出典 板本発句題叢(文政3)・近世発句類題集・嘉永版発句集

⑪ 文化句帳(4・2)・稿本発句題叢、「夕燕我には翌のあてはなき」。発句鈔追加、中七以下「我のみ翌のあてもなし」。

雲雀

雲に鳥人間海にあそぶ日ぞ (寛政五年)

出典 寛政句帳(5・1)

鳴戸なる中を小島の雲雀哉 (寛政六年)

出典 寛政句帳(6・1)

片山は雨のふりけり鳴雲雀 (文化元年)

出典 文化句帳(1・2)

木曾山はうしろになりぬ鳴雲雀 (文化元年)

出典 文化句帳(1・2)

野大根も花咲にけり鳴雲雀 (文化元年)

出典 文化句帳(1・3)

㊦ 稿本発句題叢・希杖本句集・嘉永版発句集・発句鈔追加、中七「花となりけり」。

住吉に灯のとぼりけり鳴雲雀 (文化元年)

出典 文化句帳(1・2)

㊦ 「文政句帳」(5・閏1)、「住吉や灯籠ほのかに鳴雲雀」。

古郷の見へなくなりて鳴雲雀 (文化元年)

出典 文化句帳(1・3)

浅草や家尻の不二も鳴雲雀 (文化七年)

出典 七番日記(7・1)

大井川見えてそれから雲雀哉 (文化十年)

出典 七番日記(10・2)

㊦ 中七「見へてそ「こ」から」。句稿消息、中七「見へてそれから」。

昼飯をたべに下りたる雲雀哉 (文化十年)

出典 七番日記(10・3)・志多良・句稿消息・稿本発句題叢・浅黄空・自筆本句集・希杖本句集・文政版発句

集・嘉永版発句集

門番が花桶からも雲雀哉 (文化十一年)

出典 七番日記(11・3)

㊦ 希杖本句集、上五「墓からも」。

藪尻はまだ闇いぞよ鳴雲雀 (文化十一年)

出典 七番日記(11・1)

㊦ 浅黄空、「一番立」と前書して、上五「片側(ハ)」。自筆本句集、「雲雀 巢立」と前書して、上五「片側は」。

坂本はあれぞ雲雀と一里鐘 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)

小島にも鳥打也鳴雲雀 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・11)・発句鈔追加

横のりの馬のつづくや夕雲雀 (文政二年)

出典 八番日記(2・3)・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 中七「馬のつづくや」。八番日記(2・2)、座五「夕がすみ」。

落雲雀子の声天に通じけん (文政五年)

出典 文政句帳(5・閏1)

雉

雉鳴て梅に乞食の世なりけり (寛政三年)

出典 寛政三年紀行(3・3)

㊦ 「……白き笠かぶるを生涯のはれとし、竹の杖つくを一期のほまれとして、ことし寛政三年三月二十六日江戸をうしろになして、おぼつかなくも立出る。小田の蛙ハ春知り貞に騒ぎ、木末の月ハ有明をかすみて、忽旅めくありさま也」。と記し、この句を添える。

雉鳴て飯買ふ家も見ゆる也 (文化元年)

出典 文化句帳(1・2)

昼頃やほろほろ雉の里歩き (文化三年)

出典 文化句帳(3・1)

㊦ 「春比やほろく雉の」。

雉鳴て姥が田麦もみどり也 (文化四年)

出典 文化句帳(4・3)

尻尾から月の出かかる雉哉 (文化五年)

出典 文化句帳(5・3)

㊦ 中七「月の出かゝる」。

うす墨の夕暮過や雉の声 (文化八年)

出典 七番日記(8・1)

雉なくやてんてん天下太平と (文化九年)

出典 七番日記(9・2)

㊦ 中七「てんく天下」。

雉鳴や先今日は是ぎりと (文化十年)

出典 七番日記(10・2)・志多良・句稿消息・浅黄空・希杖本句集

㊦ 自筆句集、中七「先今日が」。

一つ星見つけたやうにきじの鳴 (文化十一年)

出典 七番日記(11・3)

㊦ 上五「一星」。

山雉のけんもほろろもなかりけり (文化十一年)

出典 七番日記(11・2)

㊦ 中七「けんもほろろも」。

雉なくや藪の小脇のけんとん屋 (文政七年)

出典 文政句帳(7・3)

帰雁

行雁やきのふは見へぬ小田の水 (文化元年)

出典 文化句帳(1・1)

げつそりと雁はへりけりよしづ茶屋 (文化三年)

出典 文化句帳(3・2)

㊦ 座五「よしづ<sup>ず</sup>茶屋」。

有明の雁になりたや行雁に (文化九年)

出典 七番日記(9・2)・浅黄空・自筆本句集

㊦ 七番日記、中七「行<sup>(雁)</sup>になりたや」。浅黄空、中七「雁になりたや」。自筆本句集、中七「雁になりたや」。

行雁や夜も見らるるしなの山 (文化十一年)

出典 七番日記(11・3)

㊦ 中七「夜も見らるる」。

鳴なく／＼それ程まめで帰る雁 (文化十二年)

出典 七番日記(12・1)・浅黄空・自筆本句集・希杖本句集・発句鈔追加・文化12年2月23日付斗圍あて書簡

㊤ 上五「泣なく」。七番日記(12・2)、「鳴なく」それ程まめで帰雁」。

雁よ雁いくつのとしから旅をした (文化十三年)

出典 七番日記(13・1)

㊤ 文化13・1の条に重出。

行雁やおえどはむさしうるさしと (文政元年)

出典 七番日記(文政1・9)

㊤ 中七「おエドはむさし」。

親と子の三人連や帰る雁 (文政三年)

出典 八番日記(3・2)

蛙

油火のうつくしき夜やなく蛙 (文化元年)

出典 文化句帳(1・2)

片ひざは月夜也けり夕蛙 (文化二年)

出典 文化句帳(2・1)

㊤ 上五「片ヒザは」。

蛙とぶ程はふる也草の雨 (文化二年)

出典 文化句帳(2・2)

夕不二に尻を並べてなく蛙 (文化九年)



出典 七番日記(9・2)

いうぜんとして山を見る蛙哉 (文化十年)

出典 七番日記(10・1)・おらが春・句稿消息・浅黄空・自筆本句集・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集・発句鈔追加

㊤ 七番日記・おらが春・句稿消息・浅黄空など、「ゆうぜんとして」。

草の葉にかくれんぼする蛙哉 (文化十年)

出典 七番日記(10・2、12・2)・浅黄空・自筆本句集・希杖本句集

のさく／＼と恋をするのが蛙哉 (文化十年)

出典 七番日記(10・2)

むさしの国竹の塚といふに、蛙たたかひありける見にまかる、四月廿日也けり

瘦蛙まけるな一茶是に有 (文化十三年)

出典 浅黄空・句稿消息・自筆本句集・希杖本句集

㊤ 浅黄空、「たゝかひを見て」と前書して、中七「まけ「る」な一茶」。句稿消息、「蛙たゝかひといふを見にまかる、四月廿日也けり」と前書して、上五「瘦がへる」。希林本句集、前書「むさしの国竹塚といふに蛙たゝかひありける見にまかる、四月廿日也けり」。

住吉の神の御前の蛙哉 (文化十三年)

出典 七番日記(13・1)

寅のえど大火

火の粉追ふ声のはづれや鳴蛙 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・2)

㊦ 「寅ノエド大火」。

独座

おれとしてにらめくらする蛙哉 (文政二年)

出典 梅塵本八番日記・おらが春・浅黄空・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集・文政二年二月李園あて

書簡

㊦ 梅塵本八番日記、「独坐」と前書して、中七「白眼くらする」。おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集・季園あて書簡・浅黄空、「独座」と前書して、「にらみくらする」。風間本八番日記、「独坐」と前書して、中七「かゞみくらする」。

蛙鳴や狐の嫁が出たくと (文政二年)

出典 八番日記(2・3)

昼過や地藏の膝になく蛙 (文政七年)

出典 文政句帳(7・3)

じつとして馬に嗅るる蛙哉 (文政八年)

出典 文政句帳(8・1)・浅黄空・自筆本句集・発句鈔追加・梅塵本連句集

㊦ 文政句帳・自筆本句集・中七「馬に舐る」。

蝶

湖の駕から見へて春の蝶 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・1)

あたふたに蝶の出る日や金の番 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・1)

吹やられくたる小てふ哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・3)

蝶とぶや大晴天の虎の門 (文化元年)

出典 七番日記(文政1・3)

蝶とぶや夕飯過の寺参り (文化二年)

出典 文化句帳(2・1)

蝶とぶや二軒もやひの瘦島 (文化二年)

出典 文化句帳(2・1)

迹のてふ松原西へ這入なり (文化三年)

出典 文化句帳(3・3)

世の中や蝶のくらしもいそがしき (文化八年)

出典 七番日記(8・1)

蝶とぶやしなののおくの草履道 (文化八年)

出典 七番日記(8・1)

⑨ 中七「しなのよおくの」。

蝶が来てつれて行けり庭のてふ (文化九年)

出典 七番日記(9・2)

⑩ 八番日記(4・9)、中七以下「連〔て〕行也門のてふ」。浅黄空、「蝶のきて連〔て〕いにけり」。

蝶とぶやいよの湯桁の左り八 (文化九年)

出典 七番日記(9・2)

⑩ 「蝶とぶ「や」イヨの湯桁の」。

なまけるな雀はおどる蝶はまふ (文化九年)

出典 七番日記(9・2)

⑪ 上五「なまけ「る」な」。七番日記(9・1)、上五「起よく」。

蝶来るや何のしやうもない庵へ (文化十年)

出典 七番日記(10・3)・句稿消息・浅黄空・自筆本句集

⑫ 志多良・希杖本句集、中七「何のしやくくりも」。

蝶とぶや上野の山門明たとて (文化十一年)

出典 七番日記(11・1)

⑬ 中七「上野山門」。

世にあれば蝶も朝からかせぐぞよ (文化十三年)

出典 七番日記(13・2)・句稿消息

蝶とぶや茶売さ湯うり野酒売 (文化十三年)

出典 七番日記(13・3)

蝶行やしんらん松も知た顔 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・2)

⑭ 前書「善光寺」。

石なごの玉にまつはる小蝶哉 (文政四年)

出典 八番日記(4・2)

㊦ 文政句帳(6・2)、中七以下「玉下通る小てふ哉」。

狂へてふ狂て腹のいるならば (文政五年)

出典 文政句帳(5・8)

㊦ 梅塵本八番日記、中七以下「くるふて腹がゐるならば」。文政句帳(6・1)、中七以下「くるふて腹がゐるならば」。

浅黄空、「狂へ蝶くるふて腹が居るならば」。自筆本句集、「狂へ蝶くるふて腹〔が〕いるならば」。

庭の蝶子が這へば飛びはへばとぶ (文政一年)

出典 浅黄空・自筆本句集・梅塵本連句集

㊦ 浅黄空、「庭のてふ子が這へばとび」。自筆本句集、中七「子が這ばとび」。希杖本句集、「うら盆(補注・文政6)の用意に家に帰りければ、彼里より童に川魚やしなひて、ちからをつけたきと告ごしたるに、いさゝか嬉しく、とみに魚調ひて、待てどもく、かりの便りも中島といふ片辺にあれば、あはれおのれもちてまかりて、逢てけるに、赤渋の瘦いまだ愈ざれどもにくく笑ひける『門の蝶子が這ひばとびはへばとぶ』」。文政版発句集、「門のてふ子が這へばとび」。嘉永版発句集、「門の蝶子が這へば飛びはへばとぶ」。梅塵本連句集、「庭の蝶子が這ひば飛びはひばとぶ」(補注・推定文政7成就、素外との両吟歌仙)。

おんひらく蝶も金比羅参哉 (文政七年)

出典 文政句帳(6・4、7・5)・浅黄空・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 文政句帳(6・4)、「ランヒラく」。同(7・5)、「金びら参り哉」。浅黄空、「参り哉」。文政版発句集、「奉納」と前書して、「金びら参り哉」。嘉永版発句集、「奉納」と前書して、「金比羅参りかな」。

蝶やひらく紙も藪の先 (文政七年)

出典 文政句帳(7・12)

㊤ 中七「ヒラ／＼紙も」。文政句帳(8・3)、「蝶とぶやひら／＼紙も」。

塵の身のちりより軽き小てふ哉 (文政七年)

出典 文政句帳(7・4)

湯けぶりのふは／＼蝶もふはり哉 (文政九年)

出典 文政九・十句帳写(9)

㊤ 前書「田中」。

### 蚕

さまづけに育られたる蚕哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)・だん袋・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

蔓草や棚の蚕の食休 (文政七年)

出典 文政句帳(7・6)

㊤ 七番日記(文政1・3)、「たのもしや棚の蚕も喰盛」「人並に棚の蚕も昼寝哉」。

### 虻

道連の虻一つ我も一人哉 (文政三年)

出典 八番日記(3・5)

㊤ 中七「虻一ツ我も」。梅塵本八番日記、文政4の条にも出。

神風や虻が教へる山の道 (文政五年)

出典 文政句帳(5・3)・文政九・十年句帳写(9)、前書「奉納」。

花見虱

おのれらも花見虱に候よ (文化十二年)

出典 七番日記(12・3)・栗本雜記

㊦ 七番日記、「花見虱〔に〕候よ」。

田螺

木母寺や花見田にしとつくば山 (文化九年)

出典 七番日記(9・2)

夕月や鍋の中にて鳴く田にし (文政版一茶発句集)

出典 九日集(文政8・7序)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 九日集、「地獄」と前書して、中七「鍋の中にも」。文政版発句集、嘉永版発句集、前書「地獄」。七番日記(9・2)、「六道」と前書して「鳴く田螺鍋の中ともしらざるや」。同(12・6)、「魚どもハ桶としらでや夕涼」。八番日記(2・6)、「おどる魚桶とおもふやおもはぬや」。おらが春、「魚どもや桶としらで門涼」。

蛤

蛤の芥を吐する月夜かな (文化七年)

出典 七番日記(7・3)

若草

わか草や我と雀と遊ぶ程 (文化五年)

出典 文化句帳(5・1)

わか草や北野参りの子ども講 (文政二年)

出典 八番日記(2・2)・嘉永版発句集

⑥ 真蹟、中七「北野へ曲る」。

芽出しから人さす草はなかりけり (文政二年)

出典 八番日記(2・2)・自筆本句集

⑦ 八番日記「目出しから」。

草青む

餅になる草の青むぞくよ (文化十一年)

出典 七番日記(11・1)

⑧ 中七「草が青むぞ」。

桜草

我が国は草もさくらを咲きにけり (嘉永版一茶発句集)

出典 稿本発句題叢・随斎筆紀・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

⑨ 発句題叢、「桜草」と前書して、上五「我国〔は〕」。文政版発句集・嘉永版発句集、「桜草といふ題をとりて」と前書して、「我国は……咲にけり」。

堇

なべずみのかかれ迎しも堇哉 (文化七年)

出典 七番日記(7・1)

⑩ 「ナベズミノかゝれとて」。

鼻紙を敷て坐れば堇哉 (文政元年)



出典 七番日記(文政1・3)

㊦ 中七「敷て居れば」。七番日記(文政1・12)、中七「尻に敷つゝ」。

菜の花

菜の花や行抜ゆるす山の門 (享和三年)

出典 享和句帳(3・11)

㊦ 前書「使犬吠シル事ナカレ」。

菜の花も一つ夜明やよしの山 (文化二年)

出典 文化句帳(2・2)

㊦ 中七「一ツ夜明や」。

なの花や灯のちらちらに小雨する (文化三年)

出典 文化句帳(3・2)

㊦ 中七「灯のちら／＼に」。

なの花や雨夜に見ても東山 (文化五年)

出典 文化句帳(5・2)

ほの／＼と乞食の小菜も咲にけり (文化九年)

出典 七番日記(9・2)

なの花に上総念仏のけいこ哉 (文化九年)

出典 七番日記(9・3)

かるた程門のなの花咲にけり (文化十年)

出典 七番日記(10・1)・句稿消息・随斎筆記・浅黄空・文政版発句集・嘉永版発句集・発句鈔追加

㊸ 志多良・希杖本句集、中七「門の菜晶も」。

菜の花やおぼぼが庵も夜の体 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・3)・句稿消息

㊹ 中七「おぼぼが庵も」。浅黄空・自筆本句集、中七「おぼぼが庵の」。

菜の花の中を浅間のけぶり哉 (文化十三年)

出典 七番日記(13・3)

からし菜の心しづかに咲にけり (文化十一年)

出典 文化三十八年句帳写(文化4)

五加木

西行に御宿申さんうこぎ飯 (文政十一年)

出典 未詳

蕨

鎌倉の見へる山也蕨とる (享和三年)

出典 享和句帳(3・10)

今晴し雨とも見へてわらび哉 (文化二年)

出典 文化句帳(2・1)

㊺ 上五「今晴れし」。

鳥辺野の地蔵菩薩の蕨哉 (文化十年)

出典 七番日記 (10・3)

㊦ 上五「鳥べの」と」。

木の芽

落柿舎茶日つづく木の芽哉 (文化三年)

出典 文化句帳 (3・1)

㊦ 中七以下「奈良茶日つづく木「の」芽哉」。

躑躅

山寺は竈も後架もつつじ哉 (文化三年)

出典 文化句帳 (3・2)

㊦ 座五「つゝじ哉」。

椿

片浦の汐よけ椿咲にけり (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・4)・七番日記 (12・12の末葉に「寛政元年ヨリ文化六年迄」と注した28句中に出)

㊦ 寛政三年紀行、「浦くの浪よけ椿」。

牛の子の顔をつん出す椿哉 (文化二年)

出典 文化句帳 (2・1)

古郷は牛も寝て見る椿哉 (文化三年)

出典 文化句帳 (3・1)

藤

藤井寺、西国五番の札処也

藤咲くや順礼の声鳥の声 (寛政七年)

出典 西国紀行<sup>(寛政)</sup> (7・3)

⑩ 「此堂(補注・融通大念仏寺)より天王寺の塔、酉いぬの方に半里ほど、小村あり。東南の方より大和川流る。こゝより二里、藤井寺、西国五番の札処也」(前文)。

藤さくや已に卅日の両大寺 (文化八年)

出典 七番日記 (8・3)

鳶のいる餅屋の藤は咲にけり (文化八年)

出典 七番日記 (8・3)

藤さくや木辻の君が夕粧ひ (文化八年)

出典 七番日記 (8・3)

藤棚や引釣したる馬の沓 (文化十二年)

出典 七番日記 (12・11)

⑪ 「善光寺大門前に乞食<sup>(キ)</sup>イザリが手筋見るとて人々こそぞりけり」と前書して、中七「引釣らしたる」。

梅

かつしかに知人いくら梅の花 (享和三年)

出典 享和句帳 (3・8)

⑫ 前書「羔裘」。

草分の貧乏家や梅の花 (享和三年)

出典 享和句帳 (3・12)

⑨ 座五「梅〔の〕花」。

梅の月牛の尻迄見ゆる也 (文化元年)

出典 文化句帳 (1・12)

先以梅の咲けりくらま口 (文化元年)

出典 文化句帳 (1・12)

梅見ても青空見ても田舎哉 (文化元年)

出典 文化句帳 (1・12)

梅の花我家にてはなかりけり (文化元年)

出典 文化句帳 (1・7)

梅咲や行よい門のいく所 (文化元年)

出典 文化句帳 (1・3)

片店の草鞋も春や梅の花 (文化元年)

出典 文化句帳 (1・12)

⑩ 中七「わらじも春や」。

梅がかやどなたが来ても欠茶碗 (文化元年)

出典 文化句帳 (1・12)

⑪ 上五「梅がゝや」。

梅咲や三文笛も音を出して (文化二年)

出典 文化句帳(2・12)

梅がかや針穴すかす明り先 (文化三年)

出典 文化句帳(3・12)

⑤ 上五「梅がよや」。

藪脇にこそり咲けり梅の花 (文化四年)

出典 文化句帳(4・2)

⑥ 座五「梅〔の〕花」。

梅咲やあはれことしももらひ餅 (文化五年)

出典 文化句帳(5・1)

藪の梅主なし状のさらさるる (文化七年)

出典 七番日記(7・1)

⑦ 座五「さらさるる」。

梅さくや平親王の御月夜 (文化八年)

出典 七番日記(8・1)・我春集

⑧ 七番日記・我券集、前書「相馬京旧懐」。文政版発句集・嘉永版発句集、「相馬覽古」と前書して、上五「梅が香や」。

ちりめんの狙が三匹梅の花 (文化八年)

出典 七番日記(8・1)

⑨ 中七「狙が三疋」。文化三十八年句日記写(8)、「庚申」と前書して、中七以下「猿がいさむや梅〔の〕花」。文政句帳(8・2)、中七以下「猿がなりけり梅の〔花〕」。

梅咲や一日ごろのつくば山 (文化八年)

出典 七番日記(8・1)

㊤ 上五「梅咲くや」。

梅さくや我等が門も十五日 (文化九年)

出典 七番日記(9・1)

梅さくや飴の鶯口を明 (文化十年)

出典 七番日記(10・2)・句稿消息

三月十五日、庵を出なんとして

笠ざるや梅のさく日を吉日と (文化十年)

出典 希杖本句集・句稿消息・浅黄空・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 句稿消息、前書「二月七日家を出る」。浅黄空、前書「旅立廿五日」。自筆本句集、中七「梅〔の〕咲日を」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書なし。

梅花やあけべきよと鳥の鳴 (文化十年)

出典 七番日記(10・4)

㊤ 「鳥語」と前書して、中七以下「アケベムキョト」。

梅がかや生覚なるうばが家 (文化十一年)

出典 七番日記(11・春)

㊤ 文化9・10末葉に「文化十一年春」と注した引句(歌)中に出。希杖本句集、上五「梅さくや」。

梅さくやかぎを加て御狐 (文化十一年)

出典 七番日記 (11・1)

㊦ 句稿消息・浅黄空・自筆本句集、中七「鍵をくはへし」。

古郷や梅干婆が梅の花 (文化十一年)

出典 七番日記 (11・春)・希杖本句集

㊧ 文化9・10末葉に「文化十一年春」と注した31句(歌)中に出。希杖本句集、中七「梅干婆々が」。

膳先へ月のさしけり梅の花 (文化十二年)

出典 七番日記 (12・1)

㊨ 座五「梅〔の〕花」。

門の梅家内安全と咲にけり (文化十三年)

出典 七番日記 (13・2)・句稿消息

㊩ 浅黄空・自筆本句集、「新家賀」と前書して、「家内安全と咲けり門の梅」。随斎筆紀、「家内安全と咲けり門の梅」。発句鈔追加、「どの門も家内安全うめのはな」。

梅の月首の月や巢鴨道 (文化十三年)

出典 七番日記 (13・2)

身一つに大な月よ梅がかよ (文化十三年)

出典 七番日記 (13・1)

野仏も赤い頭巾や梅の花 (文化十四年)

出典 七番日記 (14・9)

がらくやびいらくうりや梅の花 (文化十四年)



出典 七番日記 (14・1)

㊦ 中七「ピイ／＼うりや」。

片片は草履道也梅の花 (文化十四年)

出典 七番日記 (14・1)

㊦ 上五「片／＼は」。

都ぢや梅干茶屋の梅の花 (文化十四年)

出典 七番日記 (14・1)

梅咲や地獄の釜も休日と (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・3)

梅咲やせうじに猫の影法師 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・12)

梅の世や蓑きて暮す虫も有 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・11)

㊦ 中七「蓑き〔て〕暮す」。

梅がかやおくに一組わらぢ客 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・2)

㊦ 「梅が／＼や……わらぢ客」。

家一つ有梅一つ三日の月 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・2)

㊤ 座五「三ヶの月」。

梅の花爰を盗めとさす月か (文政二年)

出典 梅塵本八番日記(2年)、おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 風間本八番日記(2・1)、座五「さす月よ」。

藪尻のさいせん箱や梅の花 (文政二年)

出典 八番日記(2・2)

㊤ 発句鈔追加、上五「藪原の」。

梅咲や江戸見て来たる子ども客 (文政二年)

出典 八番日記(2・3)

㊤ 中七「江戸見て来る」。

梅咲や泥わらじにて小盃 (文政二年)

出典 八番日記(2・11)

㊤ 中七「泥わらじ(ち)にて」。

ちさい子の麻上下や梅の花 (文政二年)

出典 八番日記(2・12)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 八番日記、前書「天神祭」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「天神参」。

関守の灸点はやる梅の花 (文政二年)

出典 おらが春・発句鈔追加

㊤ 上五「関守りの」。

梅咲や信濃の奥も草履道 (文政四年)

出典 八番日記(4・9)・だん袋・発句鈔追加

㊦ 中七「信濃のおくも」。

遠くからおがんでおくや梅の花 (文政五年)

出典 文政句帳(5・1)

梅咲くや門迹を待つ青畳 (文政五年)

出典 文政句帳(5・閏1)

本陣

雪隠の鏡も明く也梅の花 (文政五年)

出典 文政句帳(5・10)

㊦ 文政句帳(5・10)、前書「本陣」<sup>(陣)</sup>。文政句帳(6・2)、中七「鏡も明き〔け〕り」。

梅さくや手垢に光るなで仏 (文政六年)

出典 文政句帳(6・2)

梅さくやごまめちらばふ猫の塚 (文政七年)

出典 文政句帳(7・春)

㊦ 文政句帳(6・3)に、「文〔政〕七〔年〕夏の部」と注した71句中に出。文政句帳(6・4)の「文〔政〕七〔年〕四月部」と注した36句中に、座五「猫の墓」。

梅さくや方方から来るいせ土産 (文政七年)

出典 文政句帳(7・2)

㊦ 「方ぐくから来るいせ土産」。

貝殻で家根ふく茶屋や梅の花 (文政八年)

出典 文政句帳 (8・11)